

教職生活を通して得る教員の学びの分析

Analysis of what in-service teachers learn from their teaching experiences

高 木 幸 子

教員となった後の喜びややりがい、起こりうる課題やそれらへの対応を視野に入れて、教員養成段階の教育課程を考えることができれば、教員になった後の教職生活をより充実したものにするができる。本研究は、教員養成課程を経て教員となった後の経験によって、どのような教師の喜びや課題意識が生まれるのか、また、教職経験により何を学んだと感じているのかを明らかにすることを目的とする。そのために、2004～2019年に教員養成学部を卒業した62人を対象に質問紙調査を行い、卒業後の年数や分析対象者の条件をそろえた33人を分析対象者として回答データをテキスト分析した。その結果、教職経験の長短に関係なく、学びの中心に子供の存在があり、教師自身が教職に必要な事柄を身に付けることへの注力から、子供の多様さの理解や個別の対応へと具体的な取り組みへの広がりなどが確認された。今後は、他の調査項目についても分析を進め、本研究の考察を深めていきたい。

KEY WORD 教職経験, 教師としての学び, 質問紙調査, テキスト分析

1. 背景と問題の所在

教職経験による教員の授業観や学習観の変容、教職経験との関係性を明らかにしようとする研究は、これまでも様々なアプローチがなされてきている。例えば、教育実習生と熟練教師の授業を比較し、授業中に観察できる教師が児童生徒に働きかける教授技術や意図の違いを捉えようとするものや、学習状況の捉え方の違いを明らかにしようとする研究などがある。

北尾・速水(1985)は、教師と実習生が同じ学習内容の授業を行い、そこでの教師と児童の発言をカテゴリー分析している。熟練教師の授業と比較して、実習生は授業者の側からの発問が多く、児童の発言に対するうなずきなどの反応が少なかったことが報告されている。姫野(2020)の研究では、教育実習生は子供や発表者等に漠然と視線を向ける回数が多く、教室に生じた出来事を受動的に知覚する傾向があり、熟練教師は、特定の意図のもとで選定した子供集団に視線を向け、能動的に知覚する割合

が高いことが報告されている。また、中島(2017)は、中学校体育授業において、教師の生徒へのかかわりと言語的コミュニケーションの違いに着目している。教育実習生の声かけは一方的な指導やアドバイスが多く、熟練体育教師は説明を促すかかわりや課題意識を引き出す声かけが多かった。このかかわり方の違いによって、熟練体育教師の授業では主体的な授業参加姿勢を引き出すための声かけやかかわり方によって、生徒たちが課題解決に向かう話し合いを活発にしていることが確認された。さらに、水津ら(2013)は、熟練教師と学生の教室談話をカテゴリーに分類し、機能の特徴、児童への要求及び児童の発言へのコメントの違いがあることを明らかにしている。学生は授業進行を重視し、児童に解答と準備が完了した状態の報告をよく求め、児童を管理しようとする発言の頻度が高いことが示唆された。一方、熟練教師は、児童の活発な議論を重視し、児童に説明と再思考をよく要求していた。つまり、熟練教師は対話形式の授業を設定しようとし、児童の発言を精緻化し、学習を深めようと試みていることが示唆された。

このような教育実習生と熟練教師の違いは、教員として学級経営や授業実践などの経験の積み重ねが関係していると考えられる。もちろん、教員個々が本来的に持っている基本的な考え方などによっても変わってくると思われるが、それでも、教員になってからの児童生徒や同僚との関係、学校での経験、個人の生活と教員としての生活のありようは、教員の考え方や価値意識などの醸成に影響されることが推察できる。

中教審答申「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(2016)」には、教師は「教える専門家」であると共に「学びの専門家」であることが求められている。教職の中核には授業実践の力量が位置づいていることを考えると、これからの授業のありようについても見直しが求められていると言える。

本研究は、教員養成学部を卒業して、教職についている教員を対象として進めるものである。教員の世界は、他業種と比較すると、男女教員の採用や昇進の機会は平等であるといわれている。しかし、実際には、意図せずとも作られた男女の格差が存在し、学校における「システム内在的差別」として概念化されて説明されているという(楊2018)。また、高島(2014)は、教職の職務配置に着目した研究の中で、小学校では担任する学年に、中学校では担当する教科にジェンダー・バイアスの実態が確認できること、それにもかかわらず、女性教員は、自身の職場を「ジェンダー・バイアスのない職場」と評価し、この実態と認識のずれは、家庭責任を持った女性教員に対する「配慮」の結果として理解されていたことを報告している。宗形(1988)は、男女のキャリア発達の差異を示している。それらは、女性が、①職業を人生にどの程度取り入れるかの決断過程が存在し、キャリア発達は男性よりも複雑かつ多様であること、②職業選択としてのキャリア選択の範囲がより制限されていること、③多くの場合、職業人としての役割と家庭人としての役割を統合する必要があること、④キャリア教育やキャリア開発の訓練を受ける機会が乏しい、という4点である。

これからの教職のありようを考えるにあたっては、職業と個人の生活の充実の両面から考える必要があり、ライフイベントによる環境変化も含んだ検討が必要である。

2. 研究目的

本研究は、教員養成学部の卒業生を対象に質問紙

調査を行い、教員としての取り組みの実態を整理するとともに、得られた自由記述の内容を分析して教師として重要視している内容や教職経験を通じて得られる喜びや困難を明らかにすることを目的としている。その際は、教職生活の実態把握と共に、教職経験年数の長短による違いの有無や共通性について確認する。また、本研究の調査対象者のほとんどが女性であることから、教職という仕事についての分析だけでなく、結婚や出産などのライフイベントによる生活環境や家庭環境の変化が予想されることから、これらの影響についても可能な範囲で整理し、解釈を行う必要がある。

本稿では、調査の全体像を説明するとともに、調査結果については教職経験を通して得た学び(大切だと考えている内容や教職の喜びや教職経験を通して嬉しかったこと)に焦点をあてて論じる。実施調査では、本稿で結果を述べる内容に加え、難しいと感じたことや困ったこと、保護者や同僚とのかかわりなど、多項目にわたり調査データを得ているが、その分析結果や考察は別稿で報告する。

3. 研究方法

3.1 質問項目の構成

調査に用いる質問項目は、共通項目として「内容Ⅰ：基本情報」(教職についてからの経験年数、現在の担当教科や担任の有無、授業時数など5項目)、「内容Ⅱ：調査時点における職務に対する意識」(学級経営に対する意識、授業中における教科指導に対する意識など15項目)、「内容Ⅲ：教職に対する充実感や課題」(満足している点、満足していない点、授業観・教育観・子ども観と課題意識などの13項目)の計32項目で構成する。また、調査対象者は、卒業後、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、幼稚園や保育所など、幅広い学校種に勤務している教員等であることが分かっていることから、それぞれの職場の事情の違いに基づいて回答できる質問項目として「内容Ⅳ：やりがいや課題、仕事を続ける上での要望や期待」を加えている(資料1)。

内容Ⅰは、具体的な年数や時間の回答を、内容Ⅱは、5件法(5：問題ない、4：ほぼ問題ない、3：どちらともいえない、2：少し不安、1：どうしてよいかわからない)での回答を得る。また、内容Ⅲ、Ⅳは、自由記述により回答を得る。

また、本調査は、教職経験を積み重ねる中での個々人の考え方や不安に感じる内容の変容を捉えることも研究の発展として視野に入れている。2007

～2009年度に、本研究と同様の目的をもつ調査を実施していることから、今回の質問紙調査においても、比較が可能なように、質問項目をそろえ(高木2011)、当時の結果との比較ができるようにする。そのうえで、今回の調査には内容Ⅳを新たに追加する。この質問項目を加えるのには2つの理由がある。一つは、前回調査から10年近くが経過し、調査対象者を取り巻く環境は大きくかわっていることが予想されることから、調査時点での職務状況や教職についての考えを捉える必要があると考えたことによる。もう一つは、ライフイベントを経験した教員が増えていることが予想されることから、個別の経験による考えなどの変容を捉える必要があると考えたことによる。該当する卒業生がそれぞれの記述する考えや説明は、教職生活における職業生活と家庭生活の関係や生涯学び続ける教員を支援する方法を検討する上で有用な記述資料になると考えたことによる。

3.2 質問紙調査の実施

調査対象者は、2004～2019年度の期間に、教育学部家庭科教育専修(家庭科教育研究室)を卒業した62人である。卒業時に正規教員に採用された者は38人である。その後、講師経験を経て教員になっている者が複数人いること、一方で、教員採用後に別の道に進路を変更した者がいることが質問紙調査を発送する段階で把握されている。そこで、調査時点での最新の状況を把握するために、62人全員を調査対象者として、質問紙は2020年4月に郵送し、6月末を目途として返送を依頼した。その後も返送があったことから8月末までの回答を全て対象として扱った。

3.3 調査結果の整理と分析

回収した調査回答データは、統計的に処理をして共通の傾向や特徴を分析する。また、自由記述により得られている回答は、表記の統一などの基本処理を行った後、KH-coderを用いたテキスト分析の材料とする。

4. 結果と考察

4.1 分析対象者の基本属性

質問紙調査を実施した62人中、40人から回答を得た(回収率63.5%)。40人の回答者は大学卒業後1年から15年の期間にわたるすべての年度の卒業生が含まれていた。

本研究では、教職経験の長短によって、どのような違いや共通性があるかを明らかにしたいと考えて

表1 回答者の卒業後年数

(2020年4月時点)

区分	卒業後の年	回答人数	
グループⅠ	1年目	3	13
	2年目	1	
	3年目	2	
	4年目	3	
	5年目	2	
	6年目	2	
グループⅡ	7年目	3	14
	8年目	2	
	9年目	3	
	10年目	4	
	11年目	2	
グループⅢ	12年目	1	13
	13年目	3	
	14年目	4	
	15年目	4	
	16年目	1	
計		40	

いる。そこで、分析にあたっては、回答を得られた40人を卒業後の年数によって3つのグループに分けた。それらは、卒業後5年以内の集団(以下、グループⅠと記す。)、卒業後6～11年の期間にある集団(以下、グループⅡと記す。)、卒業後11年以上の集団(以下、グループⅢと記す。)として回答を整理した。その結果、グループⅠには13人、グループⅡは14人、グループⅢは13人が該当した(表1)。

40人の回答者の属性を確認したところ、教員(保育教員含む)、大学院生、企業勤務、退職(卒業後、教員を退職、別の職業に転職を含む)に4分類できた(表2)。

グループⅠの回答者には、調査前年度末に卒業して大学院に進学した卒業生が3人含まれていた。これらの3人の回答は学部学生としての実習経験を基に回答されていたことから、分析対象データとしては使用しないこととし、分析対象者は10人とした。グループⅡは、14人の回答者のうち、退職者が3人、企業へ就職した者が1人、退職して大学院生になった者が1人であった。退職した3人の1人、大学院生になった1人は、調査実施前年度まで教員であり、

表2 回答者の属性

グループの表記をGとした。(人)

分類	GⅠ	GⅡ	GⅢ	計
教員(保育教員含)	10	9	12	31
院生	3	1		4
企業		1	1	2
退職		3		3
計	13	14	13	40

全調査項目に教員としての経験を回答していた。そこで、当初、これら5人を差し引いた9人を分析対象者としていたが、上述の2人を加えた11人をグループⅡの分析対象者とした。そして、グループⅢに含まれる退職者1人も、調査年前年度まで高等学校教諭をしており、その経験に基づいた回答がなされていたことから分析対象者として加えた12人を分析対象者とした。その結果、3グループを合わせて33人を分析対象者として進めることとした(表3)。

表3 分析対象者(教員等)の勤務内訳

グループの表記をGとした。(人)

教員経験校種	GⅠ	GⅡ	GⅢ	計
小学校	4	8	8	20
中学校	5	2	1	8
高等学校			1	1
特別支援学校	1	1	1	3
幼稚園(こども園)			1	1
計	10	11	12	33

4.2 分析対象者の担任の有無や帰宅時間

小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、幼稚園(こども園)に勤務経験のある33人を対象に、調査時の担任の有無と平日の平均的な退勤時刻を整理した(表4、表5)。

担任の有無については、グループⅠが80%、グループⅡが72.7%、グループⅢが66.7%、そして全体では72.7%の卒業生が担任をしていた。

退勤時間については、退勤時間が最も遅かったのはグループⅡに含まれる教員で22時であった。最も多い退勤時間は19時であり、14人(42.4%)が

表4 担任の有無

グループの表記をGとした。(人)

分類	GⅠ	GⅡ	GⅢ	計
担任あり	8	8	8	24
担任なし	2	3	4	9
計	10	11	12	33

表5 勤務地の退所時間

グループの表記をGとした。(人)

時間	GⅠ	GⅡ	GⅢ	計
14			1	1
16			1	1
17			1	1
18	1	2	2	5
19	7	3	4	14
20	1	2	1	4
21	1	1	1	3
22		1		1
不明		2	1	3
計	10	11	12	33

該当し、全体の67.7%が、18時～20時に退勤していた。卒業後の年数が6～10年のグループⅡに含まれる教員は、教員としての仕事にも慣れ、学級担任だけでなく、主任など責任ある分掌にもついていることが考えられる。学校の中で担う業務が増える時期だということは理解できるが、退勤時間が22時というのは、この時間が日常的な退勤時間であれば、勤務時間では終えられない業務の多さが主要要因とも考えられる。

また、グループⅢには、退勤時間が14～17時の教員が3人含まれていた。子育てとの両立を図る目的で「短時間勤務制度」を活用していることが記述されていた。背景はそれぞれ異なっていると思われるが、彼女らの記述からは、早めに学校を出ることについて、協力してくれる同僚への感謝がつけられていた。また、同僚への理解を得るために、普段からの人間関係作りを意識していることが記されていた。

職業生活と家庭生活を両立する重要性や職場での意識改革が求められている昨今であるが、調査結果を見ると、学校種や各学校により大きな差があることがうかがえた。教員個々の業務への取り組みや進め方の違いもあるだろうが、学校としての勤務の在り方の方針があれば少しは遅い退勤を防げるのではないか。勤務時間後の残業時間の上限が示されるようになってきていることから、今後はこの状況が改善されるよう、制度的な支援の検討を期待したい。

4.3 学級経営や学習指導に対する認識

学級経営や学習指導などにかかわる教師の考えや大切にしたい事柄などについて、15項目の質問項目(図1)を、5件法の自己評価(5:問題ない、4:

- ① 子供の実態や発達段階を理解すること
- ② 正しい言葉を用いて話したり声の抑揚をつけたりすること
- ③ 話を聞き子供の話を引き出すこと
- ④ 正しい文字や筆順を示すこと
- ⑤ 子供の作品や記録を評価・分析すること
- ⑥ 子供の興味・関心や教材を基にした授業を構想すること
- ⑦ 教材の収集・選択・分析や教材を活用すること
- ⑧ 学習内容に合わせたテストを作成すること
- ⑨ コンピュータなどの情報機器を利活用すること
- ⑩ 子供の実態に合わせた授業を構想すること
- ⑪ 子供のレディネスやスキルの差に基づく個に応じた指導を行うこと
- ⑫ 子供の学習状況を評価すること
- ⑬ 子供の評価結果に基づき授業を改善すること
- ⑭ 自作教材を作成すること
- ⑮ 年間指導計画を作成すること

図1 学級経営や学習指導に関する質問項目

ほぼ問題ない、3：どちらともいえない、2：少し不安、1：どうしてよいかわからない)で調査した。

これらの15項目について、卒業後の年数の長短による3グループ別に平均点を算出して比較した。

15項目の各項目について、「3：どちらともいえない」を基点として、それよりも不安が大きい3未満の項目に注目すると、経験年数の浅いグループIでは7項目、グループIIでは2項目が該当していた。この結果から、卒業後5年程度は、学校で行われている多くの事柄について不安を感じ、自身の取り組みに自信をもてずに教員としての生活を過ごしていることが推察された(図2)。

経験の浅い教員(グループI)が不安と感じている質問内容に注目すると、「⑮：年間指導計画を作成すること」(2.67)、「⑦：教材の収集・選択・分析や教材を活用すること」(2.69)、「①：子供の実態や発達段階を理解すること」(2.77)、「⑥：子供の興味・関心や教材を基にした授業の構想」(2.77)、「⑪：子供のレディネスやスキルの差に基づく個に応じた指導を行うこと」(2.77)、「⑩：子供の実態に合わせた授業を構想すること」(2.85)、「⑭：自作教材を作成すること」(2.92)の7項目が該当した。これらの結果を基に、全体としてこの時期の教員が不安を感じている内容をまとめると、質問項目①⑥⑩⑪からは、「子供の実態を理解することや実態に合わせて教材や授業を作成すること」の難しさを感じ

ていると考えられた。また、質問項目⑦⑭⑮からは、「見通しを持つことや教材を作成すること」の難しさを感じていると思われた。いずれも子供の実態(学習状況や多様性)を把握することや個別な子供の実態への対応の難しさに直面していることが推察できた。

卒業後6～11年と経験を積みつつあるグループで、平均値が3未満になった2項目は、「⑤：子供の作品や記録の評価・分析」(2.64)と「⑪：子供の実態に基づく個に応じた指導」(2.64)であった。経験を積むことで、子供の理解や実態に合わせた指導をどのように行えばよいかを経験的に理解できるようになっていることが推察できた。しかし、子供の学習を分析することや評価に基づいて個別の対応に活かすことは、子供の状況をより精緻に見極めなければならない点でより高度な力量が求められる。教職経験を重ねている教員にとっても、難しい事柄であることがうかがえた。

卒業後11年以上のグループでは、質問項目⑦以外は、ほぼ問題なく行えているとの回答が中心であった。質問項目⑦の内容である教材分析や収集・活用には教材研究を行う時間が不可欠であることから、教員を取り巻く状況の厳しさが関係していることも考えられる。

今回調査した15項目の中で、質問項目⑨(コンピュータなどの情報機器を利活用すること)のみ、

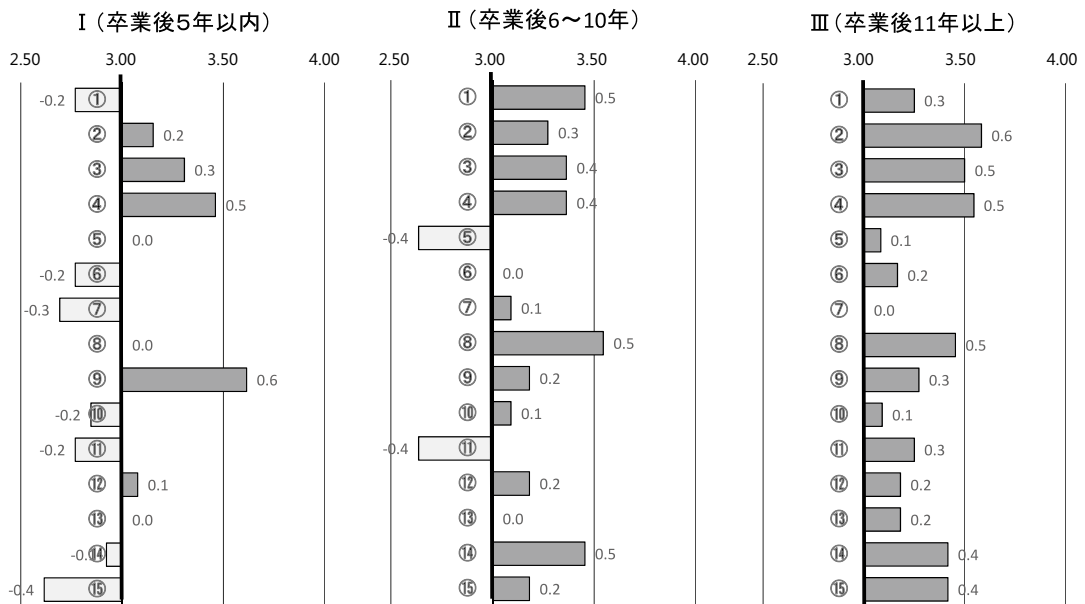


図2 グループ別、質問項目に対する認識

グループIの結果が、他の2グループよりも高い自己評価点であった。学部学生の時期から、日常的にICTを活用する機会は増えていることが結果の差につながっていると思われる。

4.4 教職生活を通して認識した内容

教職に対する充実感や課題意識、児童生徒とのかわりについての認識、授業観や教育観、同僚や保護者との関係作りについての考えなどについて15項目の質問項目について調査し、回答を得た(図3)。

回答された自由記述データは、語や表現の揺れを確認して統一したうえでテキスト分析を行った。その際は、教職経験年数(グループI、II、III)を外変数として共起ネットワークを作成し、グループ間で関係の強い語を抽出し、KWICコンコダンスにより、抽出語を含む文を確認し共通性や違いについて考察した。

4.5 教師として大切にしていること、学んだこと

質問項目のうち「教師として大切にしていること(A1)」と「教職生活を通して学んだこと(A2)」の2項目に対する自由記述の回答データを基にテキスト分析した。A1、A2の質問項目に対する記述は、総抽出語数1,857、異なり語数433、文134であった。分析は「経験年数」を外変数として、共起ネットワーク(最小語3、上位40語)を作成した(図4)。その結果、3グループに関連の深い語として、「子供、授業、大切」が抽出された。そこで、KWICコンコダンスにより、抽出語が含まれる文を確認し、経験年数による違いの有無や、違いがある場合は、どのよ

うに異なるのかを考察した。

4.5.1 教師として大切にしていること

「教師として大切にしていること」に対する記述文に注目すると、記述内容は、「授業づくり」「子供理解」「居場所づくり」の3つにまとめられた(表6-1)。

「授業づくり」にかかわっては、経験年数の浅いグループIの記述からは、「子供の目線に立って授業を考える」や「子供の実態に合わせること」「授業実践力の向上」など、自分自身の授業力を高めることに目が向いていることが読み取れた。また、グループIIの記述には、「分かった!できた!と子供

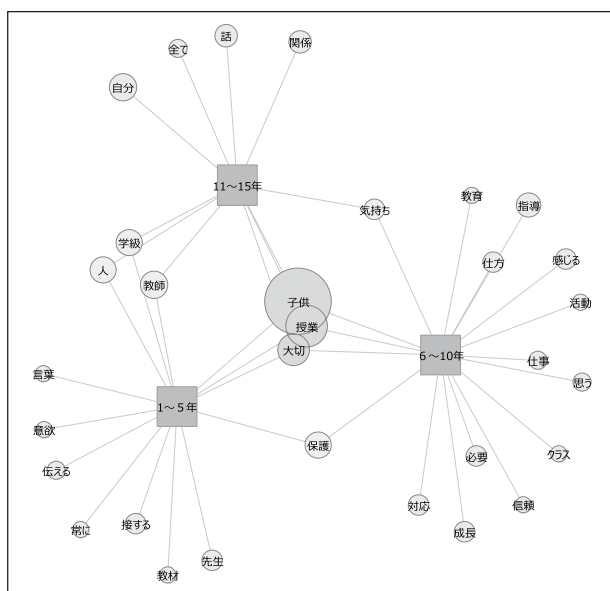


図4 A1, A2の記述を基にした共起ネットワーク

項目と質問内容

- A1: 現在、あなたが教師として大切にしていることは何か。
 A2: 教師になってから学んだと感じることにはどのようなことがあるか。
 A4-1: 教員生活で嬉しかったことにはどのようなことがあったか。
 A5: どのような時に楽しいと感じるか。また、なぜか。
 A3: 教師としてこれまでに最も悩んだことは何だったか。
 A4-2: つかかったことにはどのようなことがあったか。
 B1: あなたの学級や主に担当している教室の様子はどうか(良いと感じていることや気になっていること)。
 B2: 子供との関わりを通して気づいたこと。
 B3: 子供との対応で、一番難しいと感じること。
 C1: 最も力を入れている教科や取り組みは何か。
 C2: 指導・支援のために作成した教材があれば具体的に紹介してほしい。
 C3: 授業や指導・支援を行う中で難しいと感じることはどのようなことか。
 D1: 同僚との関係はどうか。関係作りで気を付けていることはどのようなことか。
 D2: 保護者との関係作りで大切にしていることや気を付けていることはどのようなことか。
 E: やりがいや課題、仕事を続ける上での要望や期待について。

図3 自由記述で回答する質問項目

表6-1 大切にしていること

「子供」「授業」「大切」を抽出語とするKWICコンコーダンス

項目	卒業後5年以内 (グループⅠ)	卒業後6～10年 (グループⅡ)	卒業後11年以上 (グループⅢ)
授業づくり	子供の目線に立って授業を考える。／子供の実態に合った教材、授業内容の選択。／具体的には、授業や学級づくりについて、先輩教師から積極的にアドバイスをもらったり、授業や子供との接し方を観察したりするなどしています。／授業実践力の向上。子供の実態に合った教材、授業内容の選択。／	「分かった!できた!」と子供たちが言えるような授業づくり。／授業で子供を熱中させること。／困らない授業づくりをすることです(子供同士の助け合い、掲示、可視化など)。／	教材研究の視点、授業づくりのコツ、子供の見方。／子供のよりよい成長のため、子供の興味・関心に合わせた授業実践をすることや、子供の時期実現のために、話を聞いたり、背中を押す指導をすること。／子供にとってわかりやすい内容にすること。／その子に(が) 将来必要となるスキルは何か、考えて接し、授業を作ること。／楽しいと思ってもらえる授業をすること。／仲間とのかわりを大切にしたい授業づくり。／
子供理解	子供に寄り添うこと。／子供を否定しない。／クラスの子供ひとり一人を大切にすること。／子供ひとり一人に対して愛情をもって接すること。／子供理解。／子供を一人の人として尊重すること。／子供とかわる時間を大切にすること。／	子供ひとり一人の思いを大切に、こちらの考えは示しても押し付けないこと。／子供の気持ちに寄り添うこと。／一日の中で、子供と遊んだりゆっくりお話しをしたりする時間を確保する。／子供ひとり一人を見取り、話を聞くこと。／	子供たちの気持ちに共感する思いを大事にする。／子供としての視点を忘れないこと。／子供ひとり一人の発達や個性にあわせること。／子供たちの話を聴くこと。／焦らず、余裕をもって穏やかな気持ちで子供たちとかわること。／子供との関係づくりです。／一人の人として、相手を大切に尊重して接する。／相手の心(気持ち)を大切にすること。／
子供の居場所づくり		子供の活動を増やす。／子供たちが学校を楽しんでいるところだと思えるようにすること。／子供ひとり一人が、居場所があると感じられるようにすること。／学級の子供たち全てが安心して居られる居場所(クラス)づくり。／子供たちが安心して過ごせる環境づくり。／	

たちが言えるような授業づくり」や「授業で子供を熱中させること」「困らない授業づくりをすること(子供同士の助け合い、提示、可視化など)」など、授業づくりの目的に子供の存在が含まれている記述や子供同士のかわりを考えていることが読み取れた。さらに、グループⅢの記述には、「その子に将来必要となるスキルは何なのか、考えて接し、授業を作ること」や「子供のよりよい成長のため、子供の興味・関心に合わせた授業実践をすること」など、複数の記述文から授業づくりが子供の成長を支えるものとして理解されていることが読み取れた。

「子供理解」にかかわっては、どのグループでも子供の思いを大切にすることや寄り添うこと、そのために子供の話を聞くなどかわることを大切にすることなどが共通に記述されており、この点についての違いは認められなかった。しかし、具体的なかわり方についての記述内容を確認すると、グループⅠの記述では、「子供とかわる時間を大切に」と場の設定として記述されており、グループⅡ、Ⅲの記述には、「ゆっくりお話しする時間を確保す

る」ことや「穏やかな気持ちで子供とかわること」などが書かれており、子供にとってどのような時間となればよいかについて留意している表現になっていた。

一方、子供が学校を楽しく安心して過ごせる場所であること等、グループⅡのみに「子供の居場所づくり」の大切さが読み取れる記述が確認できた。

以上、3グループに関連の深い語として抽出された「子供、授業、大切」を基に、教師として大切にしていることにかかわる記述文を基に考察した結果、「子供」「大切」を含む記述文の分析からは、卒業後の経験年数の長短に関わらず、子供の気持ちや子供に寄り添うこと、そのために子供とのかわりを大切にしたいと考えていることが確認された。

また、この点は、「授業」を含む記述文からは、教職経験を重ねる中で授業づくりの中心が変容している姿としてとらえることができた。教員になった初めのころには、自分自身の授業力を向上させることが意識されて授業づくりが進められている様子がかがえ、その後、10年程度までの間に、授業づ

くりの重点が教師自身から子供に移行する傾向が読み取れた。さらに10年を超えた教員の記述の中には、子供が分かる授業を充実させることや子供の将来を見通す中での授業づくりの大切さが意識されていることが読み取れた。

本調査を通して、教師としての経験を重ねることで、子供を大切にするという意識は変わらず持ち続けている中で、授業として具現する際に、教師が身に付けることから子供が身に付けることへと重視する点の軸足が移行していること、さらに授業を通して何を学ぶのかの意味を支える視野が広がっていることがうかがえた。

4.5.2 教師になってから学んだと感ずること

教師になってから学んだと感ずることについて、抽出された「子供、授業、大切」の語を含む記述文

を基にその内容を分類すると、「子供の理解と対応」「子供を取り巻く環境づくり」「授業づくり」「教師の姿勢」に4分類された(表6-2)。

「子供等の理解と対応」にまとめた記述文を確認すると、例えば、グループIでは、「注意したりほめたりするときには言葉のかけ方が重要である」や、「子供一人一人に合ったかかわり方が必要である」など、具体的に教員としてどのようにすればよいかという対応の仕方を学んだことが記述されていた。グループIIの記述には、「クラスや子供に応じて指導の仕方を変えていく必要があること」や「最終的に子供が納得することが、後に保護者の納得にもつながる」などが記述されていた。このように、教師としての振る舞いの学び、多様な子供とのかかわりを通して得た学びが記されていた。

表6-2 教員になって学んだこと

「子供」「授業」「大切」を抽出語とするKWICコンコーダンス

項目	卒業後5年以内(グループI)	卒業後6~10年(グループII)	卒業後11年以上(グループIII)
子供等の理解と対応	いろいろな人のかかわり方(子供、保護者、地域の方、同僚)。/子供に注意するとき、ほめるときには、言葉のかけ方や伝え方がとても重要であるということ。/どの子供にも同じように接するのではなく、ひとり一人に合ったかかわり方が必要だと感じました。/実際に服薬している子供や保護者の方とかかわって、改めてどういった特徴があるのか。/	最終的に子供がしっかりと、納得することが、後に保護者の納得にもつながる。/たとえ、昨年と同じ学年だったとしても同じ指導はできないし、クラスや子供に応じて指導の仕方を変えていく必要があること。/子供がけがをしたり、問題行動をとったりしたときの対応。/子供たちの成長過程。/	子供とのかかわり方。/
子供を取り巻く環境	子供の家庭環境やこれまでの人間関係などが大きく子供の言動に影響していることが分かりました。/いろいろな先生がいたほうが子供たちにとって良いのだということ。/その場面を見た時にすぐ伝えたり、学級全体で紹介したり、先生が見てくれていることを子供に実感させることの大切さ。/	子供ひとり一人、地域、学級、学校の雰囲気によって、教育は様々だということ。/特別支援的な事情にせよ、家庭(育ち)の問題にせよ、本当にどうしようもないほど、捉えが難しい子供も存在する。/	全ての教育活動(授業、行事、特活など)がつながっていて、子供の成長のために欠かせないということ。/
教師の姿勢	愛情もって接すると、どんな子供にも伝わるということ。メンタルが強くないと、学ぶ意欲がないと、自分も子供もダメになる。/	教師が楽しんでいると子供にもそれが伝わること。/同僚、保護者、子供、誰が相手でも信頼関係があるとないのとは話し合い等の結果が違うことをひしひしと感じた。/感性を磨くことが大切だ。/文章の仕事を通して、柔軟に対応することの大切さや他の担当との連携の必要性を感じています。/	何かを伝えるには、自分自身が経験していたり実感していたりすることが重要で、自分の人としての力が大切だと感じた。/
授業づくり	授業の中での思考がいかに教師の発問によって誘導されていたかということ。/授業の難しさ。/	同じ授業でも声掛けのタイミング、言い方一つで全く別の授業になること。/授業に100点はないということ。/	全ての教育活動(授業、行事、特活など)がつながっていて、子供の成長のために欠かせないということ。/教材研究の視点、授業づくりのコツ、子供の見方。/授業スキル(板書、立ち位置、発問など)。/授業を通して学級づくりを行うことが大切。/授業を通して学級づくりを行うことが大切。/

「子供を取り巻く環境」にまとめた記述を確認すると、全グループとも、子供や子供を取り巻く環境が子供に与える影響について言及されていた。グループⅠでは「子供の家庭環境やこれまでに人間関係などが大きく子供の言動に影響していること」、グループⅡでは、「子供一人一人、地域、学級、学校の雰囲気によって、教育は様々なであること」、グループⅢには「全ての教育活動がつながっていて、子供の成長のために欠かせないこと」と記されており、子供と子供を取り巻く環境の関係についての理解とその関係の中で学校における教育活動を進めることの必要性について、経験を通して学ばれていることが推察された。

「教師の姿勢」としてまとめた記述に注目すると、グループⅠ、Ⅱでは、教師が愛情をもち楽しむことが子供にも伝わるという点が共通に読み取れた。一方、グループⅠの記述には、「メンタルが強くないと、学ぶ意欲がないと自分も子供もダメになる」のように、教師自身のありようを強く意識している記述が認められるのに対して、グループⅡの記述では、「同僚、保護者、子供、誰が相手でも信頼関係があるとないのとは話し合いなどの結果が違うことをひしひしと感じた」とあるように、教師個々から教師集団としての学びを得ていることがうかがえた。さらに、グループⅢでは、「何かを伝えるためには、自分自身が経験し実感することが重要で、自分の人としての力が大切だと感じた。」というように、人としてのありように重ねていると推察できる記述も見られた。

「授業づくり」にかかわっては、グループⅠ、Ⅱの記述には「授業中での思考がいかに教師の発問によって誘導されていたかということ」や「同じ授業でも声掛けのタイミング、言い方一つで全く別の授業になること」など、授業における教師の役割の大きさとともに授業の難しさが記述されていた。一方、グループⅢの記述には、「授業を通して学級づくりを行うことが大切」のように、子供を育てる環境として授業を捉えていることが記述から読みとれた。

以上、教職を経験する中での学びに着目すると、「子供」を含む記述文からは、卒業後5年程度の期間では、子供そのものの理解と具体的な対応の方法を学び、その後の経験を通して、子供の多様性に基づく学びを得ていることが読み取れた。また、経験が浅い段階

では、授業の難しさと教師の働きかけの重要性を学び、経験を積む中で、授業の役割や教員集団としての考え方を継続して学んでいることがうかがえた。

4.6 教員生活で嬉しかったこと、楽しかったこと

A4-1, A5の質問に対する回答データを基に、テキスト分析した。A4-1, A5の質問項目に対する記述文は、総記述数2,324、異なり語数445、文105であった。分析は、「経験年数」を外変数として、共起ネットワーク（最小語3、上位40語）を作成した（図5）。

その結果、3つのグループと関連の深い語として、「子供、嬉しい、楽しい、感じる」が抽出された。

KWICコンコーダンスにより、抽出された語が含まれる文を確認・整理したうえで、経験年数による違いの有無や、違いがある場合は、どのように異なるのかを考察した。

4.6.2 教員生活で嬉しかったこと

教員生活で嬉しかったことについて、抽出語を含む記述文を整理・分析した。その結果、記述内容は、「成長を感じたこと」「認められること」「かかわること」に分類された（表7-1）。

「成長を感じたこと」にかかわっては、子供の成長を感じたときや子供たちの笑顔を見たときに嬉しさを感じるという点では、記述内容にグループ間での特段の違いは認められなかった。

「認められること」についても、子供からの言葉や保護者、校長からの言葉、子供からの贈り物など

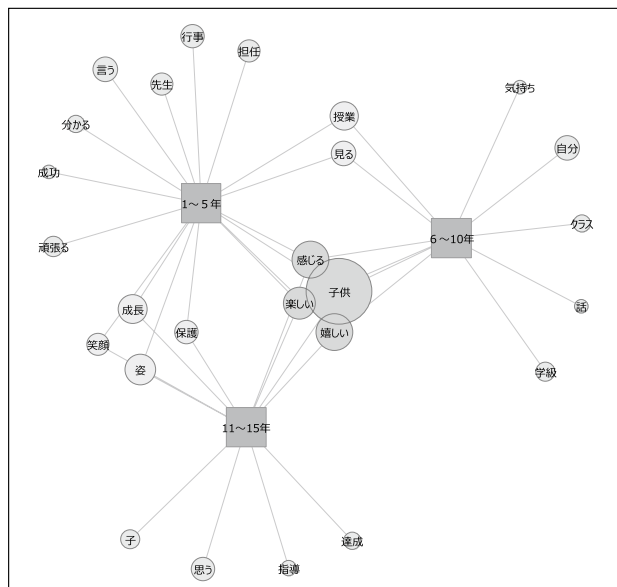


図5 A4-1, A5の記述による共起ネットワーク

表7-1 嬉しかったこと

抽出語 「子供」「嬉しい」「楽しい」「感じる」に基づくKWICコンコーダンス

語	卒業後5年以内 (グループI)	卒業後6～10年 (グループII)	卒業後11年以上 (グループIII)
成長を感じたこと	昨年、1年頑張ってきたことが、子供のアンケートを見ると、成果があったことが分かって嬉しかったです。／何かができるようになった時の子供の笑顔。／学校行事や授業内、テストで満点をとったなど、子供たちが笑顔になるときがやはり嬉しいです。／子供の成長していく姿や保護者からの感謝。／学級担任をしていた時、体育祭や合唱コンクールなどの行事の成功を目指して、学級一丸となつてがんばろうとする姿や楽しそうにしている姿を見た時。／	子供が成長したことを感じた時は、嬉しかった。／担任をしている子供が頑張っているところを見たとき嬉しい。／子供たちが前を向いて卒業、修了していった時です。／勉強面での成長はもちろんですが、サプライズで誕生会や手紙をくれたりなど、気持ちを表してくれる時はとても嬉しかったです。／	卒業式での子供たちの成長を感じた時。／子供の成長を見たり笑顔が見え時。／日々、子供たちの笑顔や成長を見るのが嬉しい。／子供ができた時に嬉しそう姿を見ること。／行事の後の達成感に満ちた教室内の雰囲気を感じた時。／
認められること	3年間大事に育ててきた子供に「先生に会えてよかった」と言ってもらえたこと。／高校での講師時代に、子供から「中学生の時は散々だったけど、思ったより、料理や裁縫ができて嬉しかった」と言われたこと。／保護者や子供に、担任の先生でよかったと言われた時。／嬉しかったことは、子供の成長していく姿や保護者からの感謝。／	自分のクラスで作っていた子供たちの作品を校長先生からほめていただいたこと。／他学年のクラスにもまねしていただけたときは、子供たちだけでなく、先生方にも認めてもらえた気持ちになった。／家庭科が好きになったと子供に言われたこと。／離任式の日、私は泣いたが、学級の子供たちも泣いてくれ、分かれがづらいと思うほど、楽しい日々を送れたことは嬉しかった。／学級で取り組んでいることが、保護者や他の教師から評価されると嬉しいと感じた。／先生のクラスでよかったと言ってもらえたこと。／	初めて6年生を担当したときに、子供たちが1年間のカレンダーを作ってプレゼントしてくれたこと。／教え子やその保護者に、数年経過しても暖かい声をかけてもらえたときに嬉しいと感じた。／家庭科での学びが、生きていると言われた時が最も嬉しかった時です。／自身の一言や行動が、子供や保護者の中に残った時。／お家の人にありがたい言葉をいただいたり、同僚の先生方から嬉しい言葉をいただいたりした時。／子供が肯定的リアクションを、返してくれた時、自分が新しい学びをえられた時。／
かかわること	子供の育て方に悩んでいる保護者の方がいて、困っていることを共有しながら一緒に支援した。／	遊んだりお話ししたりして楽しい時間を共有できた時。／遊んだりお話ししたりして楽しい時間を共有できた時。／	子供たちの感性や考え、ものの見方などに、はっとさせられたり、素敵だなと思ったり。／それでもやはり子供たちに会えると元気がもらえました。／子供であっても対人間として接し、かかわることができたこと。／

が記述されている点は、共通であると思われた。

「かかわること」に関しては、グループI、IIでは、時間や場を共有することが述べられており、経験年数の長いグループIIIのみに認められた記述として、「子供たちからもいろいろ教えられました」や「自分が新しい学びを得られた」「子供たちから元気をもらえた」「子供であっても、対人間として接し、かかわることができたこと」など、子供とのかかわりを、教師である自分に戻してその意味を感じていると推察された。

以上、教員生活で嬉しかったことについての記述内容を整理すると、卒業後の年数が短い段階では、教員である自分自身の楽しさの内容を記述しているが、教職経験を経る中で楽しさを感じる中心軸が教員から子供へと移行することや、やり取りそのものの嬉しさから含まれている意味を感じるというように、楽しく感じる内容の質が変わっていると思われ

た。この変容の方向性は、他の質問項目でも認められる傾向であった。

4.6.1 どのような時に楽しいと感じたか

どのような時に楽しいと感じたのかを、抽出語の含まれる記述文に注目して整理した結果、「子供の成長や満足感」「子供とのかかわり」「子供が喜ぶ授業の実現」の3つに分類された(表7-2)。

「子供の成長や満足感」にかかわる記述はすべてのグループで確認できた。グループIの記述には、「子供の成長や変化」や「子供の笑顔」を見たときの楽しさが書かれていた。グループIIの記述には、「できなかったことができるようになった時」や「何かをやってみようとしている姿」が見られたことなど、嬉しいと感じる子供の成長する姿がより具体的に表現されていた。グループIIIでは、具体的な子供の姿で説明されている点ではグループIIの記述と同様であったが、教師がその姿を見たときに楽しく感

表7-2 楽しいと感じたとき

抽出語 「子供」「嬉しい」「楽しい」「感じる」に基づくKWICコンコーダンス

語	卒業後5年以内 (グループI)	卒業後6～10年 (グループII)	卒業後11年以上 (グループIII)
子供の成長や満足感	子供が物事にまっすぐ頑張っている姿や行事等を通して成長する姿、周りの人に優しく接する姿を見た時に楽しさを感じます。／子供の成長や変化を見ることができるから。子供の笑顔がたくさん見える時。行事やクラス会議で成功しても、子供が満足そうにしている時。／授業で子供が興味をもって夢中になって考えてくれる時。／想定外の視点をもたらせてくれた時(子供から教えてもらった時)。／子供が授業を受けて分かった!と言ってくれた時、やりがいを感じる。／	子供たちができなかったことができるようになったときや、それに向かって頑張っている姿を見た時、子供の可能性は無限大で、それを身近に感じることができるから。／自分の働きかけによって、子供の気持ちに変化がでて、何かができるようになったり、何かをやってみようとしたり、する姿がみられたときは、子供の役に立って気がして楽しくなります。／子供たちができることが増えていくことが目に見えた時に楽しさを感じます。／授業を通して子供が新たに学んだり、できるようになったりした姿を見たとき。／成長を感じられる場面があることです。／	毎年、一年が終わった時に、子供たちの成長が感じられた時(日々では、なかなか嬉しいとか楽しいとか感じません)。／子供たちが自ら考え、行動した姿を見た時。／子供たちが、「できた!」「分かった!」といって笑顔になったとき／子供が嬉しそうなる時。／できなかったことが、指導、支援などの手だてによって、子供ができるようになり、それに対して子供自身が達成感や満足感を得た時。／子供の集中が高まり、真剣に取り組む姿、達成感を感じていると感じられる時。／子供が喜ぶ姿、成長を実感した姿は、やはり私にとっても嬉しいから。／
子供とのかかわり	子供と接している時に楽しいと感じる。／部活動や行事など、子供と一緒に活動して、子供の成長が感じられる時、単純に嬉しいし、自分も一緒に入って楽しいから。／子供たちと一緒に盛って盛り上がっている時(運動会、卒業式など)。／特に楽しいのは、子供たちが笑顔で「先生、聞いて」と話しかけてきてくれる時です。／子供と接している時に楽しいと感じる。／	子供たちと全力で遊んだり、子供の方から世間話をしてくれたりすると、心を開いてくれたようで楽しくなります。／学級が安定していて、私も子供たちも安心していろいろなことを楽しめるから。／子供と話すのが好きだから、授業で子供と話している時。／子供と昼休みに話しているとき。／日々の子供とのかかわりで、いろいろな話ができることです。／子供たちが、私や、友達の話を実際に聞いたり、意見を交わし合ったりして、みんなで一緒になって授業を進めている時。／子供たちが楽しそうに授業に取り組んでいる。	宿題がどうか、学習の理解度がどうかを抜きにして、一人の人として楽しく過ごせるから／
子供が喜ぶ授業の実現		子供にうまく援助できた(子供が笑顔になった)とき、教員としてやりがいを感じたから。／自分が準備をしたものや授業によって子供が喜んだり楽しんだりしている様子を見た時に、やりがいを感じられるから。／子供たちや保護者が満足できる(達成感を得られる)と指導している側としては、嬉しいです。／子供たちとお互いに感謝を述べ合う時、毎日一緒に過ごせた時間がかげがえのないものだったと思えるから。／子供にうまく援助できた(子供が笑顔になった)とき、教員としてやりがいを感じたから。／自分が準備をしたものや授業によって子供が喜んだり楽しんだりしている様子を見た時に、やりがいを感じられるから。／	子供の実態や興味・関心に基づいた教材が作れたとき、また、そのような授業ができた時に、楽しいと感じます。／子供との他愛のないやりとりをしている時。／一年間担任をして保護者にありがとうと言われた時に良かったと感じる。／子供たちの将来を考え、接していること。／子供の実態や興味・関心に基づいた教材が作れたとき、また、そのような授業ができた時に、楽しいと感じます。／自分のしたことが役に立ったと感じるから。／一年間担任をして保護者にありがとうと言われた時に良かったと感じる。／子供の集中が高まり、真剣に取り組む姿、達成感を感じていると感じられる時。／人見知りしていた子や、新しい環境で泣いてばかりいた子が、泣き止んで、自分のところに来て、落ち着いたり、楽しく遊べたりするとき。／

じるだけでなく、子供が達成感や満足感を感じていることに楽しさを感じていることが、複数の記述から読み取れた。

また、卒業後10年以内の教員の記述には、「子供

とかかわること」そのもの楽しさを感じている記述が認められた。具体的には、グループIの記述には、「子供と接している時」や「一緒に活動すること」など、教師が子供と一緒に何かを行うときに楽しさ

を感じていることが読み取れた。対して、グループⅡの記述には「子供と話をすること」「子供の方から世間話をしてくれる時」など、教師と子供のコミュニケーションに楽しさを見出していることや「私も子供たちも安心していろいろなことを楽しめる」など、教師と子供で作出す学級を指していると読み取れる表現もあった。

さらに、グループⅡ、Ⅲのみに見られた記述として「子供が喜ぶ授業の実現」にかかわる記述があった。子供の喜ぶ様子から、自分の取り組みにやりがいを感じていることが確認できた。また、グループⅢの記述には、例えば「年間担任をして保護者にありがとうと言われた時に良かったと感じる。」のように、自身の取り組みが時間を経て戻ってくるような場面を描いて嬉しいと感じる状況の説明がなされていた。

以上、教員生活で楽しかったことについて、記述内容を確認すると、まず、共通して言えることは、教職経験に関係なく「子供の成長や満足感」を感じた時に嬉しいと感じている点であった。一方、違いとして読み取れた点は、経験年数の浅いうちは、子供の笑顔や成長の変化に喜びを感じており、経験を重ねる中で、子供の成長する姿や子供との良好な関係が記述され、さらに、子供の成長を周りが認めるという状況だけでなく、子供が自分の成長を実感することに喜びを感じていることも読み取れた。

5. 終わりに

本研究は、教師として重要視している内容や教職経験を通じて得られる喜びや困難を明らかにすることを目的として、62人の卒業生を対象に質問紙調査を行い、回答を得られた40人のうち、調査段階で教職についていた際の回答を得られた33人の教員を分析対象として回答データの分析を行った。具体的には、教員としての日常の実態を整理するとともに、得られた自由記述の内容をテキスト分析した。

分析の結果、分析対象者の約7割が担任をもち、18時から20時に退勤していた。また、分析対象者の内3人は、「短時間勤務制度」を活用し、教職生活と家庭生活の両立を図っていた。

学級経営や学習指導に対する認識の結果では、卒業後5年以内の期間は、年間指導計画や教材の準備、授業実現、子供の理解と対応など、教職生活の基盤となる多くの事柄を不安に感じて過ごしていることがうかがえた。

また、教師として大切にしていることや学んだと

感じることについては、教職経験の長短に関係なく、子供の存在を大切に考えており、教員としての経験が浅い時期は、教師自身が必要な事柄を身に付けることに注力されていると推察された。その後、教職経験とともに子供の多様さの理解や個別の対応へと具体的な取り組みの広がりや記述内容の変容から読み取ることができた。さらに、教職生活を通して嬉しかったことについては、教員である自分自身が感じる楽しさの内容の記述から子供が楽しく感じることへの移行や子供とのかかわりを通して教員としての自身の学びと捉える様子が確認できた。楽しいと感じた内容については、教職経験の長短に関係なく、子供の成長を見ることの嬉しさが記述されていた点であった。教職経験の浅い時期は、子供の笑顔やかかわることそのものを楽しみと感じ、その後、自身の取り組みが子供に届いていることに楽しさややりがいを感じていることもうかがえた。

本調査の結果は、教員養成学部を卒業して教職に就いた卒業生が教職を続ける上で感じているやりがいや喜びを感じる内容についての一端を知るものである。また、回答者のほとんどが女性であるという点は、男女が共に働く教職という職業に内在する課題について考える契機を与えてくれるものである。

本稿では紙面の都合で扱えていない、これらの教員が直面している課題や困難の内容などについても、分析を進め、別稿で報告していきたい。

なお、本研究で実施した調査の質問項目のうち、内容Ⅳ以外のものは、2007～2009年に実施した調査でも用いた項目内容である（高木2011）。

調査対象者の教職の経験年数や人数が異なることから、本調査との単純な比較はできないものの、今回の調査結果と同様の傾向や違いが確認できた点も含まれている。本調査の分析を進め、前回調査の結果とも合わせて考察を深めていきたい。

引用文献, 参考文献

- 姫野完治, 授業実施中の授業者の視線配布と思考様式の解明－主観カメラを活用した事例研究を通して－, 日本教育工学会論文誌 44(1), 95－104, 2020
- 北尾倫彦, 速水敏彦, 教授技能の分析的研究－実習生と熟練教師を比較して－, 大阪教育大学紀要 第V部門第34巻第2号, 171－178, 1985
- 宗形比佐子(1988)女性もキャリア発達研究の展望 経営行動科学第3巻第2号, 51－61
- 中島寿宏, 中学校体育授業における熟練教師と教育

実習生の授業者としての違い－生徒の言語的コミュニケーション量と教師による生徒へのかかわりに着目して－, 北海道体育学研究52:29－37, 2017

高木幸子 (2011) 教員養成カリキュラム開発のための授業力育成に関する基礎研究, 科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書 (課題番号1953790), 106－121

高島裕美 (2014) 教員の職場における「ジェンダー・バイアス」－女性教員の職務配置のあり方に着目して－, 現代社会学研究第27巻37－54

楊川 (2018) 女性教員のキャリア形成：女性学校管理職はどうすれば増えるのか, 晃洋書房, 9

本研究は, 基盤研究 (C) 「これからの教師の成長を支える要件の抽出」 (課題番号20K02818) の助成を受けて行ったものである。

資料1

調査項目

I あなたの勤務校における実態について記入、または○をつけてお答えください。

- 0.1 あなたの教職経験年数(あるいは、卒業後の年数) ()
- 0.2 現在の職業は (教員・保育師、教員ではない、教育とは関係ない、その他())
- ① 学校種・担当学年
(幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、その他())
- ② クラス担任の有無 (有り、なし、決まっていない)
- ③ クラス担任をしている場合の担当幼児・児童・生徒数 (人)
- ④ 1週間に行う授業の数 子供の指導にあてる時数(時間)
- ⑤ 普段の帰校時間 (時ころ)

II あなたの現在の気持ちに一番近い番号に○をつけてください。

どうしてよいか分からない 1 ----- 2 少し不安 ----- 3 どちらともいえない ----- 4 ほぼ問題ない ----- 5 問題ない

- ① 子供の実態や発達段階を理解すること
- ② 正しい言葉を用いて話したり声の抑揚をつけたりすること
- ③ 話を聞き子供の話を引き出すこと
- ④ 正しい文字や筆順を示すこと
- ⑤ 子供の作品や記録を評価・分析すること
- ⑥ 子供の興味・関心や教材を基にした授業を構想すること
- ⑦ 教材の収集・選択・分析や教材を活用すること
- ⑧ 学習内容に合わせたテストを作成すること
- ⑨ コンピュータなどの情報機器を利活用すること
- ⑩ 子供の実態に合わせた授業を構想すること
- ⑪ 子供のレディネスやスキルの差に基づく個に応じた指導を行うこと
- ⑫ 子供の学習状況を評価すること
- ⑬ 子供の評価結果に基づき授業を改善すること
- ⑭ 自作教材を作成すること
- ⑮ 年間指導計画を作成すること

III あなたの現時点での考えを自由に記述してください。

- ⑯ 現在、あなたが教師として大切にしていること(大切にしたいと考えていること)は何ですか。
- ⑰ あなたの学級や主に担当している教室の様子はどうか? 良いと感じていることや気になっていること。
- ⑱ 子供との関わりを通して気づいたことにはどのようなことがありますか? また、どのような時に気づきましたか。
- ⑲ 教師になってから学んだと感じることにはどのようなことがありますか?
- ⑳ 教師になってからこれまでに、あなたが最も悩んだ出来事は何でしたか?(差し支えない範囲で)
- ㉑ つらかったことや嬉しかったことにはどのようなことがありましたか。
- ㉒ 他の同僚の方々との関係はどうか? 同僚との関係づくりについて気を付けていることはありますか?
- ㉓ 現在、あなたが学校で最も力を入れている教科や取り組みは何ですか? また、その理由は何ですか?
- ㉔ あなたが授業や指導・支援をしていて、とても難しいと感じることはどのようなことですか。複数でも構いませんので、できるだけ具体的に書いてください。
- ㉕ あなたは、どのような時に楽しい(教員をしていてよかった、働いていてよかった)と感じますか。そう感じるのとはなぜだと思えますか。
- ㉖ 子供との対応で、一番むづかしいと感じることはどんなことですか?
- ㉗ 保護者と関係を作る際に、大切にしていることや気をつけていることには、どのようなことがありますか。
- ㉘ 学校園等での指導や支援のために、オリジナルで教材を作成したことがあれば、具体的に紹介してください。また、その時の子供の様子や反応について書いてください。

IV やりがいや課題、仕事を続ける上での要望や期待についてお教えてください。

- (1) あなたの現在の仕事に関わって自由に記述ください。
- (2) 仕事以外の時間や仕事と家庭の両立などについて、自由に記述ください。